# 国家と生殖の未来

## ――二つの夢想を検証する――

服　部　慶　子

## 1. はじめに

生殖革命の「アブナサ」について警鐘を鳴らし、「産む性を担っている女性が性と生殖の場面で、基本的人権としての自己決定権をいかにして確立するか」について考察する論考がこの何十年かでいくつか発表され、生殖の将来についての危惧が表明されてきた（例えば『アブナイ生殖革命』、1989）。むろん現実の問題に関する議論・言論は不可欠であり、本論も 2018 年現在の日本やアメリカなどの現状に立っての問題提起となる。しかし、小説というフィクションの中での夢想が、一見荒唐無稽に見えたとしても、かえって現実の「アブナサ」を鮮烈な形であぶり出す強力な力を持つことがある。本論では 1986 年に出版され、2017～8 年現在テレビでの連続ドラマとなって世間を震撼させている『侍女の物語』という、カナダの女性作家マーガレット・アトウッドの小説、及び今年日本人女性である田中兆子氏が発表した『徴産制』という驚愕の小説を取り上げる。どちらの作品もサイエンス・フィクションのようなものであり、あり得ない「夢想」にも思われるのだが、30 年ほど前のカナダ人女性と現代の日本人女性が描いた二つのヴィジョンは、現在の国家と生殖の問題が未解決な状態で放置されたら、あり得ないことでもないと読者に感じさせるリアリティを持つ空想であり、それだからこそ、我々読者の背筋が寒くなるのである。

2018 年に、雑誌「新潮 45」8 月号に杉田水脈衆議院議員が執筆した「『LGBT』支援の度が過ぎる」という文章が世を騒がせ、性的少数者である LGBT への不理解と不寛容な姿勢が批判された。本論はその議論の当否については問わないが、ここでの議論が「産む性」としての生殖の問題に深く関わることは指摘しておかなくてはならない。杉田議員は、同性カップルを念頭に「生産性がない」つまり、子供が産まれないカップルは無用であり、国家の支援の対象にならないとした。これは柳沢伯夫議員が 2007 年に行った講演の中で、女性を「産む機械」とした発言が象徴的に表す言論と同根であると言えるだろう。

興味深いのは、「新潮 45」の 8 月号の特集は「日本を不幸にする「朝日新聞」」であり、杉田議員は朝日新聞が代表するリベラル・マスメディア批判の一環として執筆したということである。従って、その批判対象である朝日新聞がこの記事に大いに反応したのは当然であり、当の朝日新聞の記事を引用するのは不適切かもしれないが、10 月 2 日紙面の特集「新潮 45　揺らぐ論

壇」には、稲田朋美氏や小林よしのり氏などのどちらかというと「新潮 45」に立場が近いような人たちの意見が掲載されており、参照する意味があるだろう。その歴史認識が問題視されていた稲田氏が「LGBT は歴史認識やイデオロギーとは関係なく、人権の問題だ」とし、「日本全体が不寛容な方向に向かっている」とする意見には納得できる。最右翼だと一般に考えられている小林氏は、その「人権は国家がなければ守れないと思っているから、国家を重視します」と言い、同氏の LGBT や「産む」ことには国家が深く関わっているという意見にも肯ける。

「新潮 45」問題への反応で最後に挙げておきたいのは、作家の三津凛氏の発言である。「話題の「新潮 45」杉田水脈議員のコラム感想」の中で、「人は自分の価値観と正義を信じて守りたいものなのだ」と述べている。差別される側の立場を想像できないリジッドな考え方を批判し、「問われているのは、多様性よりも想像力の方ではないのだろうか」と問題提起をしている。LGBT に限らず、他人の立場を思い遣る「想像力」が重要なのであり、このコラムの題名は「小説家になろう」である。小説を含む文学全般が軽んじられている現代の日本だが、このコラムが問いかけているのは、「新潮 45」問題に典型的に現れている狭量で想像力の欠如した日本の現況であろう。文学を軽視する政治は想像力の枯渇を招来し、文学に最も端的に表れている「文化」への無理解に通じるのだから。

## 2. 『侍女の物語』は物語か

フィクションが現実を逆照射することがあることは、マーガレット・アトウッドの小説『侍女の物語』に典型的に見られる。本作は 1986 年に初版が出版されたが、テレビドラマ化されるにあたって、2017 年に作者自身のイントロダクションが追加され、新たな版が出された。このイントロダクションにはアメリカの現状を憂える発言がある。

> 最近のアメリカの選挙の結果を受けて、恐怖や不安が増大している。過去何十年か、というより過去数世紀に渡って勝ち得た女性の多くの権利と共に、基本的市民の自由の数々が危機に瀕している。このような対立を煽る状況で、多くの集団へのヘイトが増長し、民主的機関への軽蔑が様々な種類の過激論者によって表明されている。これを受けて、誰かがどこかで(多くの者がと私は想像するが)、自分たちが経験していることを書き留めていることは疑問の余地がないことだ。もしくは彼女たちは後にそれを思い出し、記録を残すことになるだろう。(XVIII～XIX)

明言を避けているものの、アトウッドが、ドナルド・トランプが大統領になってからの白人男性中心主義、排他主義、自国中心主義を批判していることは間違いないだろう。というのも、この小説『侍女の物語』では、極端に生殖力が落ちて国の将来が危機的になったアメリカの未来社会にクーデターが起きて、女性が人権を奪われ、生殖能力を持った女性が生殖だけのために奉仕さ

せられるというディストピアをフィクションとしているのだが、トランプ政権下において、あながちこの小説の悲観的ヴィジョンがフィクションではなくなる可能性が立ち現れていると考えられる。

生殖力を残した数少ない女性が、子供ができない政府高官の夫婦に子供を産むためだけに性を搾取され、政府に刃向かったり反政府思想を持ったりする人間は容赦なく処刑される恐怖社会を描いたこの小説について、同じイントロダクションの中で、アトウッドは読者から良く聞かれる質問として、「この小説は未来を予言する書なのか」という問いに答えている。

> いや、この小説は予言ではない。未来を予言するのは実のところ可能ではないからだ。あまりにも不確定要素が多すぎるし、予見できない可能性が多すぎるのだ。だから、この小説は予言ではないとひとまず言っておこう。もしここで描いたような未来が詳細に描けたとするなら、そのような事態は起こらないかもしれない。ただ、そのような希望に基づく考え方にも全幅の信頼を置けないこともまた事実なのだ。（XVIII）（下線は筆者）

下線を引いて強調した部分について、アトウッドはこのような未来の到来がないことを「希望に基づく考え方」とし、基本的人権を守る努力を怠るなら、ひょっとして小説で描かれたような恐怖社会が実現してしまうことを危惧していることが分かる。この箇所の4段落先で先ほど引用したトランプ政権への批判があることから、人類、もしくはアメリカにとって『侍女の物語』で描かれた社会が単なる物語でなくなる可能性を読者に訴えかけていると言えるだろう。本論イントロダクションで一例を挙げたが、国家が国民の人権を保障しているとは必ずしも言えない日本にとっても決して他人事とは言えないかもしれない。

『侍女の物語』のヒロインであるオブフレッドは、この物語の語り手でもある。小説の最後に付け加えられた「歴史的背景に関する注釈」によれば（もちろんこの部分もフィクションの一部だが）、『侍女の物語』は過去の文献であり、発掘された文書であり、その信憑性が問われるようなものであるという設定になっている。発掘されたのは金属製の密封されたトランクであり、その中に30本あったテープレコーダーに吹き込まれていたのが『侍女の物語』であるということになっている。

オブフレッドは一連の経験をした後で、テープレコーダーという媒体を通じて、恐ろしい体験を記録していることになる。このような悲惨な経験は記録すべきことであり、後生に伝える必要がある。アトウッドは2017年版のイントロダクションでも、現在進行中の憂慮すべき事態を「記録」する必要を訴えかけているが、事実であれ夢想というフィクションであれ、人間的尊厳が脅かされる事態は、語り・記録しなければならないというアトウッドの主張が物語形式の中にも表されている。オブフレッドは、拉致されて「侍女」として奉仕させられる時、何らかの注射を打たれて意識の混濁した中で、次のように言う。

私は自分の語っているのが一つの物語だと信じたい。私はそう信じる必要がある。私は信じなければならない。こんな話が単に物語にすぎないと信じられる者は切り抜ける公算がまだある。

もし私の語っているのが物語であるなら、私はその結末をどうとでもできることになる。物語の結末があれば、その後に現実の人生が戻ってくることになる。私は物語を始めた時点から自分の人生を再開できるのだ。(39)

主人公オブフレッド（この名前自体が架空国家ギレアデ共和国の「司令官フレッドの持ち物」という与えられた名前であるから、すでに主体は奪われているのだが）は、自分の語っている恐ろしい経験が物語、つまりフィクションであることを心から願っている。だが、この物語が今現在進行中のアメリカや日本の状況の帰結となりうる可能性がある中で、オブフレッドの物語を聞く読者も、このような社会の到来が途方もない夢物語であることを彼女と共に願わずにはおられない。オブフレッドは読者（もしくは聞き手）との経験の共有、もしくは希望を捨てないまでも現状をどうにかしなくてはならないという切迫した想いを共有したいと望む。次の箇所を見てみよう。

物語とは手紙のようなものだ。「親愛なるあなたへ」と私は言おう。名前を明記せずに単に「あなたへ」と。名前を付与すると「あなた」を事実で構成された世界に付与することになり、それはリスクを大きくすることであり危険さが増す。事実の世界であなたの生き残れる可能性がどれくらいあるのか、誰にも分からないのだから。だから私は古いラブソングのように「あなたへ」「あなたへ」と言おう。「あなた」は一人以上を意味するかもしれないのだ。(40)

『侍女の物語』はオブフレッドの糾弾の書であり、恐怖政治を行うギレアデ共和国では焚書に値する危険な書物だという設定であるから、そのことを語るオブフレッドは語るだけで命の危険に晒されるのだ。命を賭して語る主人公は、その危険を冒してでも「あなた」たちに訴えかける。

ギレアデ共和国でオブフレッドが一番恐怖するのは肉体的苦痛よりも、「愛」の欠落である。彼女はこう思う。

誰もセックスの切除によって死ぬのではない。我々が死ぬのは愛の欠如によってである。ここでは私の愛せる人は誰もいない。私が愛することができた人は皆死んでしまったかどこかに行ってしまった。彼らがどこにいるのか、今彼らの名前がどんな名前になっているか、誰にも分からない。彼らはどこにもいないのかもしれない。私が彼らにとってそうであるように。私もまたいなくなってしまった人間なのだ。(103)

過去を剥奪された彼女は過去に愛し得た人物を皆失ってしまったし、今このギレアデ共和国で愛せるような対象は存在しえない。彼女の性を搾取している司令官夫婦にとっては、侍女のオブフレッドは「産む機械」であり、人間的繋がりを持ってはならない。侍女仲間たちとも機械的付き合いに終始する必要があり、それから逸脱することは死を意味する。事実、オブフレッドと2人組を組んでいたオブグレンは実はレジスタントであることが分かるのだが、2人だけの秘密であったはずのことが当局の知るところになり、オブグレンはある日、突然姿を消す。

個人を消すことが支配者側にとっても息苦しい状態であるということが、ある日司令官の夫がオブフレッドを自分の部屋に招き入れ、親しくゲームをし、儀式ではない本物のキスをせがむ場面によって読者に示される。司令官は彼女から確かに何かを求めているらしい。しかしそこに「愛」が産まれる可能性はあるのだろうか。オブフレッドは悲観的だ。

> 私がここにいるのは違法行為だ。私たち侍女が司令官と二人きりでいることは禁じられている。侍女たちは繁殖のためにいるのだ。私たちは売春婦でもゲイシャでも高級娼婦でもない。全く逆の存在である。私たちがそのような範疇に入る可能性のあることはすべて排除されている。私たちが娯楽を与えるようなことがあってはならない。秘密の欲望が芽生えるような機会を持つことは許されていない。彼ら側からも私たち側からも甘言で特別の好意をもぎとってはならない。つまり、愛が芽生える足がかりは全くないのだ。私たちは二本足の子宮でありそれ以上のものではない。（136）

下線を付した箇所が示すように、侍女たちは「二本足の子宮」、つまり「産む機械」であり、司令官と個人的関係を持つことは厳禁となっている。性行為は儀式であり、愛でもなければ性欲でもない。

しかし、オブフレッドはこの引用箇所で、「愛」の欠落を強調することで、クーデター前に夫と子供がいた時代の「愛」を懐かしむと共に、何らかの「愛」を希求する気持ちを暗に示しているのではないだろうか。先ほどの引用にあったように、人間は愛の欠如によって死ぬのだから。しかし現状の政権を擁護する司令官の言葉からは、そのような希望を見いだすことができない。「我々は女性から取り去った以上のものを与えたんです」（219）と司令官は弁護し、クーデター以前の社会のひずみをあげつらう。男性にもてる女性とそうではない女性の間の酷い格差を指摘し、後者の絶望を人間の悲惨さだと批判する。さらに、結婚して子供ができたとしても、「お金だけが誰にとっても価値を計る基準で、母親として尊敬されることはなかった」（219）と旧体制の欠点をあげつらい、現体制の良さを強調する。「でもこの体制になって女性たちは保護されるようになり、穏やかに生物学的役割を果たすことができます。しかも全面的な援助と激励の元に」（219-20）と女性の地位向上を主張し、それに関してオブフレッドの意見を求める。彼らが見過ごしたことがあるだろうか、と。

彼女は司令官の論理から完全に欠落しているのが「愛」だと鋭く指摘する。司令官は言い返

す。「愛ですって？どんな種類の愛ですか？」「恋に落ちることです」というオブフレッドの言葉に、司令官は素朴で悪意のないコメントを述べている。

> 司令官は嘘いつわりのない少年の目で私を見た。「ああ、確かに、雑誌で読んだことがありますよ。それが雑誌の「いちおし」だったんですよね。でも統計を見てご覧なさい、あなた。本当に価値があることなんですか、「恋に落ちる」ということが。親が決めた結婚だって、上回ると言わないまでも、同じぐらいうまくいってきたじゃないですか。」（220）

この時点で司令官フレッドとオブフレットは個人的なミーティングを度重なって行っており、司令官は彼女に対して、親しみの呼びかけである ‘my dear’ を使っているので、決して彼は押しつけられた思想を語っているわけではない。心から愛など価値がないと考えているのだ。侍女たちを虐げる（彼らの言い方だと「教化」する）「小母」であるリディア女史も、侍女たちに「愛など問題ではないのです」と言う。このギレアデ共和国の一番恐ろしいところは殺人や儀式的性行為の強要よりも、愛という概念の不在なのかもしれない。

この小説の世界では、女性の不妊が多いのと同様に男性にも妊娠させる能力が著しく劣っているようで、どうしても子供が必要な司令官夫妻の妻は、侍女に他の男性との関係によって妊娠させることを考える。それが法律違反であり、もしその秘密を知られたら侍女が処罰されるのだが、妻には咎が及ばない。オブフレッドが司令官の子供を妊娠しないため、フレッドの妻のセリーナは、彼女とお雇いドライバーのニックに関係を持たせようとする。オブフレッドはその求めに応じざるを得ないのだが、この関係を必ずしも押しつけられて嫌々応じた性行為だけであるとはとらえていないようだ。

> 彼［ニック］は私の服を脱がせ始めている。暗闇に包まれた男の顔は私には見えない。私は息もできず、立っていられず、もはや立ってはいない。彼の口が私を覆い両手も私の上にあり、私は待ちきれず、彼はすでに動いていた。愛、ずいぶん久しぶりだ、私は再び肌の中で生きている。私の心は両手を彼に回したまま落ちていき、柔らかな液体が至る所にあって、尽きることはない。私はきっとこれっきりだろうなと思った。（261）

司令官とは違い、ニックには個人的欲望を覚える「愛」を感じているのだ。相手が権力者の見張り役「目」であるかもしれないにも拘わらずである。この引用箇所の直後に、語り手のオブフレッドはこの部分は自分が作り上げた物語で、実はそんな風には事は進まなかったと言い、「ロマンスぬき」の即物的な行為であったと述べるが、この後でこの叙述も現実とは違うと言い、彼女の語りは揺れている。結局のところ、どのように事が進んだのかはっきりしないとまで言い、「愛の感じ方はいつもおおよそのことに過ぎない」（263）と言う。このように限りなく夢想に近い「愛」の叙述だが、少なくとも感情のないギリアデ共和国にあって、たとえ「おおよそのとこ

ろ」に過ぎないとしてもオブフレッドが「愛」や「感情」を志向していることは確かだろう。

権力の手先かもしれない男との情事というエピソードは、本作『侍女の物語』が明らかに意識している、ジョージ・オーウェルの小説『一九八四年』（1949）のジュリアという権力側の女性と、抵抗者である男性ウィンストンの恋愛を思わせる。「戦争は平和なり　自由は隷従なり　無知は力なり」とする『一九八四年』のビッグ・ブラザー（監視カメラにつけられたニックネーム）が常に見張っている監視社会の息苦しさの中で、ジュリアとウィンストンの抱擁はディストピアの暗澹たるヴィジョンの中での救いとなっている。『侍女の物語』ではニックとオブフレッドの関係はオーウェルの小説ほど強い力を持つ展開はされていないが、アトウッド自身が監修しているテレビドラマ版ではそれがかなり前面に出されていることを見ると、作家の意図として、この恋愛についても（原作では恋愛とまでは言えないが）、アトウッドはオーウェルを踏襲する意図があったと想像できる。

『侍女の物語』で最後に取り上げたいのが、拉致される前の正常な社会でのオブフレッドの夫であるルークと司令官フレッドとの比較である。クーデター発生後しばらくして、女性の財産が差し押さえられ、職を奪われるという事態が生じる。女性は夫に頼ってしか生きていけなくなり、財産の個人所有を剥奪される。前世紀の遺物である「父権社会」が復活するのだ。「女性には黙って完全なる従順さを学ばせたまえ」と唱え、「アダムは騙されなかったが、イブは騙されて罪を犯したのだから」（221）という社会が復活したとき、夫のルークは妻にどのように接したのか。語り手オブフレッドは自分が仕事も財産を失った不当さについて夫に訴える。

> 夫は私を慰めるつもりで、「たかが仕事じゃないか」と言った。
>
> 「どうやらあなたが私のお金をすべて握ったみたいね」と私は言った。「私は死んでもいないんだけど。」私は冗談めかして言ったつもりだったが、背筋の凍るような声しか出なかった。
>
> 「お願いだから」と彼は言った。彼はまだ床に跪いたままだった。「僕はずっと君の面倒は見るから。」
>
> 私は思った。あの人はすでに私の保護者気取りだ。それから思った。自分はすでに被害妄想的になってしまっている。
>
> 「分かっている」と私は言った。「愛しているわ。」（179）

彼女がここで言う愛は、彼女が希求している愛というより、相手に迎合する自分を正当化するための形骸化した愛でしかない。「普通」の社会においても、結局男の根底には女性に対して「保護者」であることを望む気持ちがあるのではないか、と彼女は疑う。ルークは妻が仕事を失った夜、セックスを求める。このときの彼女には愛が形骸化していることに伴い、性への欲求も消えている。夫はいぶかる。

「どうしたんだい？」

「分からない」と私は言った。

「僕たちにはまだ・・・」と彼は言いかけたが、続けて私たちが何をまだ持っているかについては言わなかった。ふと気づいたのだが、彼は「僕たち」と言うべきではないのだ。だって、私の知る限り、彼からは何一つ奪われていないのだから。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

何かが動きバランスが崩れたのだ。私は自分が縮んだように感じた。だから彼が私を元気づけようと両手で私を抱きしめた時、私は人形のように小さかった。私は愛が自分を置き去りにして、つき進んでいくように感じた。(182)

もちろんクーデターが起きなければバランスは崩れず、ルークという夫との愛も持続していたのかもしれないが、いったんこのように女性が人権を奪われる事態に至ると、彼女の主体が縮み、夫との愛も変質せざるを得ない。

では、「愛」が欠如したギレアデ共和国の司令官は、女性の人権についてどのように考えていると小説では描かれているだろうか。もちろん、まさにこの共和国こそが女性の人権を剥奪したのだから、その国の高官が人権を認めるはずもないと思われる。ただ、作品ではフレッドという司令官について、オブフレッドが少し違った感想を持っていることが描かれる。

「あなたを信じましょう」と彼は言う。微笑んでいる。司令官は私が目立つことをやってのけたり、早熟さを見せたりするのを好んでいる。ちょうど良く気がつくペットが耳をピンと立てて芸をやる気まんまんであるかのように。彼の是認は暖かいお風呂のように私を包んでくれる。私は男一般に感じていた、ルークにすら感じていた敵意を司令官に対しては全く感じることがない。(183-4)

本引用箇所は、前の引用でルークのパトリアーカルな感情への反感を述べた直後の章の冒頭であり、両者が比較して読める意図的な配置となっている。愛を信じない一方で司令官には女性への敵意＝偏見もない。それは元の普通の社会とは違っていて、その面ではルークと好対照になっていると言えるだろう。もちろん上の引用にあるように、女性をペットとして飼っている前提での司令官の女性是認であり、ルークとは別の形であるが、女性に対して庇護者ぶっている態度という点では二者の考えは通底しているとも考えられる。

この対極にある 2 人の男性の描写を近接させている作者の意図はどこにあるのだろうか。現実世界にあっても、いったん均衡が崩れて男の本性が現れたとき、その本性は仮想の世界ギレアデの指導者の男のそれに意外に近く、その境界を越えることは、我々が考える以上に容易であることをアトウッドは訴えているのではなかろうか。とんでもない恐怖世界の夢想と思えた社会もその実、我々が日常で住んでいる現実界と懸隔がないのだということを。この小説には、われわ

れのように現実界に住む者も一歩間違うと、悪夢の世界に突入する危険と隣り合わせなのだということが示されている。『侍女の物語』は物語＝フィクションではないのかもしれない。

## 3.『徴産制』と国家

『侍女たちの物語』と同じく、『徴産制』が描く世界でも、極端な少子化が進んでおり、人口確保のために、日本国家はある制度を思いつく。それが徴兵制ならぬ、徴産制であり、この世界では性を転換できる技術が確立していて、病気の蔓延で若い女性の数が極端に進んだため、若い男が強制的に性転換をさせられて女性になって出産をするという制度ができ、それが徴産制である。『侍女の物語』では性を搾取されるのは女性であったが、本作では男性ということになり、一見対照的なフェミニズム社会ができあがっているように思える。

アトウッドの作品中の侍女たちも、例えば日本人団体観光客たちに好奇の目で見られ、質問攻めにあっているが、この作品中の性転換をした男たち（産役男と呼ばれる）も、差別的眼差しを向けられる。性転換してしばらく研修を行うのが「産教センター」であるが、「高い塀で守られていた産教センターから一歩外に出れば、世の中は、産役男に対するもの珍しさ、偏見、差別意識に満ち満ちていたのだ」(28)。たとえば第一章「ショウマの場合」では、貧しい農家に育ったショウマは家族のために「徴産制」に応募したのだが、元来体躯が大きく無骨な異形の者だったので、女性になっても体型は変わらず、道で男とぶつかったときは「どけや、デカドブス」と嘲罵される。

産役男は、赴任先でパートナーを得て、妊娠することが求められる。ショウマも初老のうどん屋のアオタさんをパートナーとし、妊娠もし、アオタさんは女になったショウマにプロポーズする。本来は男であったショウマはアオタさんと結婚して子供を産めば、女性として生きていく必要がある。極めてややこしい状況だ。ショウマも思う。

> あの人たちにすれば女が子供を産むのも男が産むのもどっちだっていいんじゃないだろうか。
>
> だってあの世は、もう男も女も関係ない、魂の世界であり、一番望むことは、人類が死に絶えることなく子を産み、魂をつないでいくことだろう。
>
> この世が、男と女を好きに選べるようになったら、もっと魂だけのつきあいができるようになるのだろうか。うーん、分からない。この世の人間には肉体があるから。(57)

男も女も子供を産めるようになる社会は、妊娠可能な少数の女性が虐げられる『侍女の物語』の世界よりも一見理想的に見える。ただ、性転換した男にはやはり偏見の目が向けられることを忘れてはならない。

第二章の産役男ハルトは高級官僚であり、にもかかわらず徴産を免れることができず悲惨な体

験をする。妊娠できないからだ。徴産制が施行されているこの小説のなかの日本では、若い男は次のように言われる。

> 「子供を産んだ男はえらい。子供を産んで働いている男はもっと偉い。子供を産まず仕事ばかりしている男は、男として不完全である。子供も産まずに自由だけ謳歌した男が、歳を取って『税金で助けてください』というのはおかしい。ヒコクミンである」(81)

男が「産む機械」とされているわけだ。ここで注目すべきは国家の方針に従わないものは「ヒコクミン」とされる点である。国家が個人を抑圧して従わない者を許さない不寛容な社会であるという点では、本作は『侍女の物語』と同根であると言えるだろう。

避妊をしているジョージが、自分のことを「ヒコクミン」だと思うかとハルトに聞くと、ハルトはこう答える。

> 「ぜんぜん！だって、私たちって国のために子供を産んではいないけど、産役男が楽しく過ごせる手助けをしてる。それで彼女たちが子供を産むことができれば、それこそ国のためになっているじゃない？」(111、下線は筆者)

国民は国のために奉仕しなければならないというハルトの言葉は、官僚であった彼がその価値観を持ち続けているためであろうが、日本の国家のありようとして、第二次世界大戦からあり続けている価値観であるともいえよう。独自の考えを持つジョージは「国のため」とは言わず、自分の支援活動によって目の前にいる産役男たちが女になって絶望したりせずに、妊娠して結果的に喜んでいるなら、それでいいと思っていると表明するのである。ジョージは「徴産制」には反対だし、少子化対策なら移民を増やす努力をすればいいと思っている」(112) と言う。

第三章のタケルはさらに悲惨な目に遭う。徴産男を利用する売春宿に強制連行され、毎日客をとらされる。本来は違法な行為が行われている場所のはずで、警察も行政もその存在を知っているにもかかわらず、目をつぶって放置している。ここから国の徴産制の本来の意味が、作品の中で明らかになってくる。

> 国は、子供の数を増やすことが目的で徴産制を施行したと主張している。けれども、裏の目的は、若い男が女に変わって、若くない男を慰安するためではないのか。日本国の平和と安全のため、女不足でストレスをためている日本国内に住む男の性欲を満たすため、命をかけて働く男たちの必需品としてのセックスを与えるためではなかったのか。(146)

性転換手術が可能になった世界では、男女の区別が曖昧になっている。ハロウィーンの夜、第四章のキミユキの家族と友人たちは全員女性の姿になっており、性を変えた変装に意味があるの

かという問いが浮上する。

「だって、男らしい男、女らしい女、ってやっぱ魅力あるし」

―――――――――――――――――――――

「でも、女らしさって、世の中が平和で安全でないと伸び伸びと発揮できないよね。戦争なんかしてたらミニスカートも水着も振り袖も着れないし、男の人だって強さばかり求められて、女々しくなれないでしょ。男も女も、女らしくふるまえるのは、自由がある証拠。（194）

しかし、国家がセックスをコントロールして、性別を変えさせることで個人の尊厳や人権を踏みにじる社会にそもそも自由はあるのだろうか。国が「徴産制」を導入した意味が、小説最後に示唆されている。そもそもこの制度が導入された際、国民投票が行われ僅差で可決されたのだが、導入後数年が経過して再度国民投票を行ったら結果が変わってくるかもしれないと登場人物が言う。「徴産制」反対の過激派による爆弾テロがあり、制度を導入した元首相が殺害されたという。「産役男に対する性的搾取や暴力、金目当てのパ契約［パトロン契約］など、徴産制の闇の部分がクローズアップされたら、反対派が増えるかもしれない」（250）と、ある人物が発言する。国民が制度を受け入れている最大の理由が、「国から金がもらえる」ということで、反対理由の第一位は「産事教練や赴任先での共同生活が嫌」だという。

このような状況の中で、社会は自由であるとは言えず、徴産制は、すでに性別を選ぶ自由の問題ではなくなっているという。そして、最後に付け加える。

「国立の養育施設で育った子供たちは、小さい頃から、国が決めたことは絶対であり従うべきであるという教育を受けているようです。彼らは大人になると、徴産制だろうが徴兵制だろうが、国の制度を無批判で受け入れていくかもしれない。」（250）

結局、本小説の結末に至って、奇妙きてれつな「徴産制」という制度導入の隠された意図は少子化対策というより、従順でペットのように国家という主人の言うことを無批判に受け入れ実行する国民を作り出すことであったことが分かるのである。フェミニズム的オブラートを纏わせた上で、他に道がないものとして法律を施行することによって、国家は国民を馴化させ、従順なロボットに仕立て上げるのである。国家の将来を守り、国民の人権を守るという大義の下に、国民の権利も自由もない全体国家を密かに構築する隠れ蓑だったと言わざるをえない。

## 4. 最後に

以上、国家と人権とジェンダーに関して、二つの夢想＝小説を検証した。現在進行形で進む狭

量な現代社会においては、おそらく国家を動かしたり動かそうとしている権力者たちは忙し過ぎて小説など読まないのかもしれない。それどころか、政府批判の小説を毛嫌いするか、できれば発禁にしたいのかもれない。小説の多くは現実の抱える様々な問題に対する「ノー」を突きつけるものなのだから。だから、せめて我々はこれらの小説を読むことで、現代社会が『一九八四年』や『侍女の物語』や『徴産制』などの文学が警鐘を鳴らすディストピア的ヴィジョンに近づいている、もしくは近づく可能性を胸に刻んでおく必要があると考える。

**参考文献**

Atwood, Margaret. *The Handmaid's Tale.* New York : Anchor Books Edition, 1998.
Orwell, George. *Nineteen Eighty-Four.* London : Penguin Classics, 1989.
田中兆子『徴産制』（新潮社、2018）
グループ・女の人権と性『ア・ブ・ナ・イ生殖革命』（有斐閣選書、1989）